けやき通信 2018. 3月 NO.297

―錦織佳代子―

- 足るを知る。
- 己の欲せざることを人に施すことなかれ。
- 天知る。地知る。人ぞ知る。

子どものころ、母から聞いたことば。
今も静かに胸にある。
こうありなさいと教えられたのではない。
子ども心に納得することばだったのか。
時々ふと浮かび上がってくる。
人が欲望のままに生きたらどうなるか。
わが身にふさわしい暮らし、よろこびや満足、
たのしみはいつもそばにある。

淡いピンクの満開のサクランボの花を窓ごしに
ながめながら、こんなことを思いました。
メジロ・モズ・ジョウビタキ・ヒヨ・スズメ、
みんなこの花が好き。

ひじき煮

高山なおみさんのレシピ。フィンランドの孫はひじき好きだそう。送るにも軽い！

①干しいたけ2枚 ひと晩水につけてもどし、薄切り。芽ひじき20g、水につけてもどしザルに上げる。

②にんじん1/3本、油揚げ1枚 細切り。れんこん1/3節、いちょう切り、水にさらしてザルに。

③フライパンを強火にかけゴマ油大さじ1をひき、①②をさっと炒める。酒大さじ3、みりん大さじ2、きび砂糖大さじ1、しょうゆ大さじ2 1/2、いたけもどし汁1/2カップ加え、煮汁がなくなるまで弱めの火で煮る。

サラダ、和え物、ごはんにも、ひじき料理いろいろ、思い出して作ってね。

読書ノート

●ユージン・スミス写真集　著者 ユージン・スミス　(株)クレヴィス

「チッソ、水俣病」、ユージン・スミスのモノクロ写真「入浴する智子と母」は私の脳裏に焼きついている。1934年の「アメリカの労働者」からはじまり、太平洋戦争中の「サイパン」「沖縄」、ウエールズの炭鉱夫、貧しいスペインの村、そして日本の「日立」、「水俣」。ユージン・スミスとアイリーン美穂子スミスのエッセイもあって、写真家の強い精神が伝わってくる。これらの写真は、すべて事実であり真実であるからこそ、訴える力が強い。写真家の眼差しを肌に感じる。水俣の入浴する母娘の写真はこの本にはないが「子どもたちの日々」(福音館)にある。これは私の大切な本。2冊の写真集、ぜひ図書館でどうぞ。経済成長を求めて、我々は何をしてきたのだろう……。(むこうやま かん)

●わたしたちの無言館　窪島誠一郎　アリス館

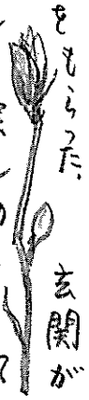
満州事変から始まって、アジア太平洋戦争を経て、敗戦の1945年8月まで15年にわたって戦争を続けてきた日本。2000万人ものアジア諸国民が犠牲になり約310万人の日本国民が命を落した。戦没画学生慰霊美術館に並ぶ画学生たちもみな命を奪われ「将来生み出したであろうたくさんの「作品」もこの地上から奪い去ったのです」。静かな怒りがこみ上げてくる。

●戦争で死んだ兵士のこと　小泉吉宏作　ベネッセ

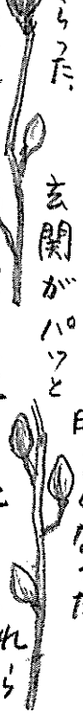
鉛筆の線描きのようなシンプルな絵。文も1、2行。「今はのどかな森の中の湖のほとり」「ひとりの兵士が死んでいる」。静かにしずかに語られる言葉の重み。戦争のおそろしさ、ひとりの命、かけがえのない命を誰が無差別に殺す権利などあろうか。本棚の隅でまた開かれる日を待ってくれていた小さな本。

3月11日、東日本大震災七年目、あの日、夜遅く仙台のマヤの生存を確認できた。大学の建物崩壊の中で奇跡的に命を救われた。十五日、私たち夫婦は心を残しながら、産後、体調の思いカヤの助けにフィンランドへ発った。天災の中でのとりかえしのつかない大きな人災原発事故。あちこちで再稼動……。

紫色のモクレンをもらった。



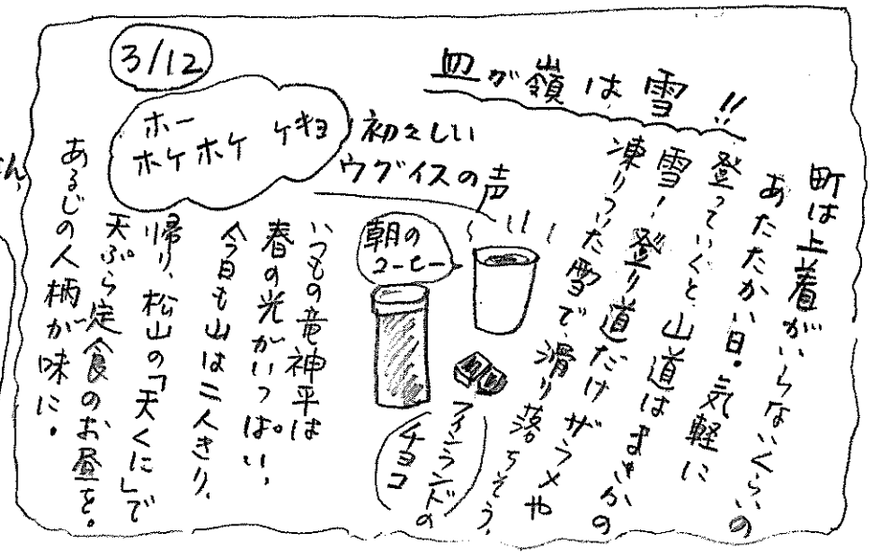
玄関がパッと明るくなった。



つくし

みつけた～、散歩帰り。
片手にいっぱい摘めた。
つくし大好き！春に一度は食べたい。
卵とじ、花かつおと炒めたり…。北海道ではカマで刈るほど一面に生えていた。札幌の友人宅で庭のつくしを煮てあげたら「生まれてはじめての味、おいしい～」とよろこんだ。

土筆

寒風の中、いつも一人で運根堀りをしていたお兄さん、軽トラのそばにいたので声をかけた。

3/12 皿が嶺は雪!!